ニッポン ドクター和の臨終図巻

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

⑩② ケーシー高峰さん

母に勘当されながらも貫いた下ネタ医事漫談

医療用白衣を「ケーシー」と呼ぶと知ったのは、医大に入学してしばらく経ってからでした。ケーシーと呼ぶたびに私の頭に過るのは、とぼけたメガネのあのお顔。名前の由来となったアメリカの人気ドラマ「ベン・ケーシー」なんて、知りもしませんでしたから。

唯一無二のお色気医事漫談師。

「おっぱいは揉んでから吸うのが正解。吸ってから揉むと喧嘩になる。これをスッタモンダという」

「私は婦人科のインターンをやってUターンした。若いコのあそこはいいんだけど、年寄りのあそこは醤油で煮詰めたような色だった。これをキッコーマンという」

…演芸場では女性客も大笑いしている。セクハラに厳しくなった現代においても、この人だけは治外法権でした。誰からも愛される下ネタがもう聞けないと思うと、残念でなりません。

ケーシー高峰さんが4月8日、入院先の福島県いわき市の病院で亡くなりました。享年85。死因は、肺気腫との発表です。最後の仕事は、昨年の秋頃。酸素吸入器をつけながらも、そのお色気漫談は健在、命がけの下ネタでした。

ケーシーさんの母方は山形県で代々続く産婦人科。ご兄弟をはじめ、一族の多くも医療者だそう。ケーシーさんも日大医学部に入学しましたが、途中でモダンジャズなどにはまり、芸術学部に転部したそうです。ケーシーさんの生き方を羨（うらや）ましいと思う人は多くいるでしょう。私も羨ましい。

本当は別の夢があったのに、親に言われるままに医師になった人は多くいます。「実は映画を撮りたかった」「格闘家を目指していてね」なんて、医者仲間で飲みながら叶わなかった夢を話します。

私は自らの意思で医者になりましたが、本当は歌手になりたかった…実はこの連載が書籍化され、4月25日に『平成臨終図巻』として発売されます。出版記念として26日に大阪でライブをします。平成に亡くなった歌手の歌を歌う会です。変な町医者の歌とトークを聴いてやろうという人はぜひ私のHPを見てください。ごめんなさい、脱線しましたがケーシーさんなら許してくれるはず。

医学部をやめたことで、ケーシーさんの母・シヅエさんは激怒。息子を勘当しました。この人、門脇シヅエさんといい、辺地医療に一生を捧げた伝説の女医です。しかし、シヅエさんは息子が芸人として活躍していく姿を密かに喜んでいました。テレビのドッキリをきっかけに十数年ぶりに再会。

「一人前になったな」と褒めながらも、いつかは医療の道へ戻ってほしいと、願っていたのだとか。そんな母の想いを知って、ケーシーさんは、白衣を着続けたのかもしれませんね。医大をやめても、母は偉大でした。グラッチェ！